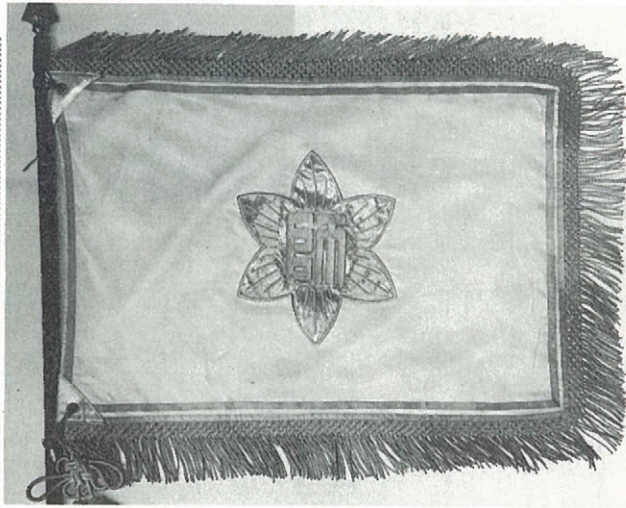


信州大学 教育学部 同窓会報

信州大学教育学部同窓会報

【第2号】

発行人 松橋英幸
事務局 長野市西長野6ノロ
信州大学教育学部
教育工学センター内
TEL (0262) 32-8106 (代表)



長野師範学校校旗
戸隠升麻は、明治二十七年新植物として発見命名され
台覧に供し、宮中に献上されている。大正三年九月、こ
れを图案化し、長野師範学校の校旗とし、昭和二十六年
師範学校廃止に至るまで使用した。

ひろがる同窓生の輪の中で

同窓会長 松橋 英幸



同窓会を設立して本
当によかったと痛感す
る。全国に散在する二
万名に近い同窓生への
呼びかけは、大海に小
石を投ずるに似た仕事
であった。ところが、

同窓会創設のご案内を差上げ、その反響の予想以
上に大きかったことに感動した。全国各地から寄
せられた会費は、二千五百名をはるかに超えて、
事業計画、予算計画のメドが立てられるまでになっ
ている。振込み用紙の通信欄に、同窓生の熱い思
いがピッシリ埋められている。すでに現職を退か
れた大先輩や県外在住者からいたたく激励の便り、
近況報告には感激の毎日であった。卒業年次毎の
同級会の小さな輪が、世代や地域の枠を超えて、
同窓の連携の輪を一举に拡大した意義は大きい。
同窓会の当面の課題は会員名簿の整備にある。
現在、会費納入時に、氏名、入・卒業年次、住所

等を電算にインプットして会員名簿を逐次整理して
いる。来年は教育学部開学四十周年に当るので、
記念事業として「同窓生名簿」の改訂編集に着手
したいと考えている。

会則六条の「信州大学教育学部に在籍した者」と
する正会員規定について、学部以前の卒業生は
含まれないのかというご指摘が二、三あった。こ
の件については、包括学校として当然前身校を含
むものであるが、疑義のないように今総会で修正
提案を予定している。

同窓会の今後の活動について、単年度事業と長
期事業に分けて推進したい。そのため、予算計画
も、学部新入生の会費を充当する一般会計と過
年度卒業生の会費を備蓄する特別会計の二本建てと
なる。

本年度の事業としては、会費納入を促進して組
織の強化を図ることを基盤にして、同窓会名簿の
作成準備、母校教育学部発展のための協力、同窓
会報の発行などを計画している。なお、第一回通
常総会は八月十一日に信濃教育会講堂で開催し、
同窓生の実践女子大助教佐藤綾子氏に記念公演
をお願いすることになっている。

長期事業としては、第一に同窓会館の設立であ
る。同窓生の諸会議をはじめ、親睦交流、研究発
表の場とし、ぜひ将来構想として考えてみたい。
第二は研究助成基金の設立である。東京在住の名
取久仁氏（昭和二十年卒）より特別なご芳志を
いただいた。このような特別寄付を基金として、同
窓生、学生等の優れた研修の助成にあて善意の生
きる活用をはかりたい。

同窓会は設立して日も浅く、山積する課題のす
べてが未知との遭遇である。同窓生の皆さんの熱
いお力添えを糧に、一步一步基礎を築きながら、
連帯の輪をひろげてゆきたいものである。

(昭和28年3月卒 鍋屋田小学校長)

「同窓会設立総会報告」

信州大学教育学部同窓会設立総会は、昭和六十二年八月十一日、長野市西長野町六の口 信州大学教育学部東校舎E五〇四番教室において、一九九名にのぼる多数の参加者を得て、誠に盛大に開催された。

午前十時三十分には開会され、発起人会を代表して松橋英幸会長から母校の充実発展を期し、同窓生相互の親睦提携を深めるため同窓会の設立総会を開催する運びになった旨の挨拶があった。

次いで、議長団の選任に移り、出席会員の中から竹前稀市、中島博人、倉田稔の三氏が互選された。また、総会の議事録署名人として深井悌、深沢よしのの両氏が選任され、書記に杵渕恭宏氏と野口宗雄が任命された。

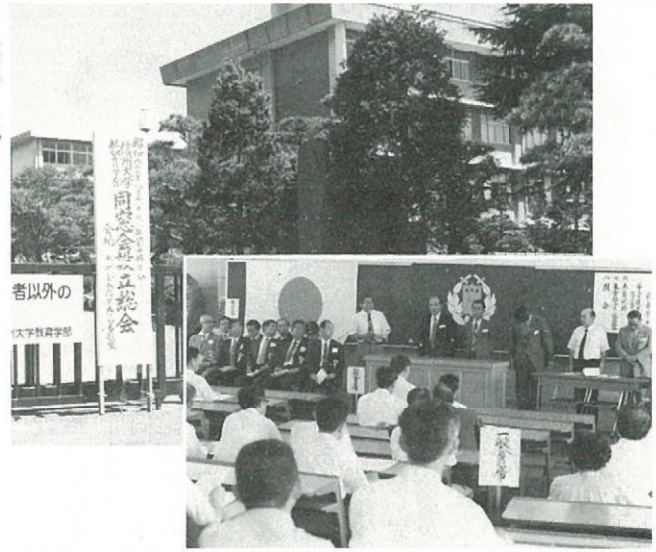
次に議事に移り、三つの議案が提出された。

第1号議案 信州大学教育学部同窓会設立に関する件については、発起人古川貞雄氏から『信州大学教育学部同窓会会報』（昭和六十二年八月十一日 設立総会記念号）に記載されている設立趣意に基づき本議案の提案説明があった。議長より全会に諮られ、全員一致これを拍手をもって承認した。

第2号議案 信州大学教育学部同窓会会則の承認に関する件については、発起人岡田富雄氏から会則の提案がなされ、総則、会員、役員等、名誉会長及び顧問、会議、会計からなる内容について説明があった後、全会一致これを承認し、昭和六十二年八月十一日から本会則の施行を決定した。

第3号議案 教育学部同窓会第一期役員を選任に関する件については

(1) 事務局関谷俊行氏から、会則第十条によって会長、監事の提案があり、全会一致これを



承認した。

(2) 会長から副会長、理事、幹事の委嘱提案があり、議長から全会に諮られ、これらが承認された。

(3) 更に、名誉会長に関して第十三条にもつき会長から提案があり、教育学部部長の推薦が承認された。

(4) 会長から全役員を代表して、就任受諾の挨拶がなされた。

信州大学長北条舒正氏と長野県知事（代理）村好雄（県教育委員会教育次長）の来賓祝辞があったのち、塩川正十郎文部大臣ほか十四氏からの祝電が披露され、正十二時閉会した。

尚引き続き学部の生協で親睦会を持ち楽しいひと時を過ごした。

（設立総会書記 野口 宗雄）

事務局 便り

△1V 入会状況等について

同窓会発足以来、早くも一年が経過いたしました。この間、事務局には県内は勿論全国各地で御活躍の同窓生諸氏から、同窓会の設立を歓迎し、その発展を望む暖かい便りが数多く届けられました。また、実業界で成功された会員からは多額の寄付金が寄せられました。

六十三年度から新入生全員が会員に加わるようになっており、この意味でも学部と同窓生が太いパイプで結ばれることになりました。

さて、会費の使途については、学部の将来発展のための助成、同窓会館設立、同窓生名簿刊行、同窓生の研究助成、学生のための就職運動等、同窓生と同窓会の充実・発展のために有効に活用させていただく所存です。そのためにもより多くの会員が同窓会に入会されますよう切にお願い申し上げます。

△2V 会員名簿整備についてのご案内
ご承知の通り、学部創設三十周年記念事業の一環として、昭和五十六年に『卒業生名簿』が刊行されました。このたび同窓会設立に際し、この『卒業生名簿』を頼りに、『同窓会報』・会費納入の振替用紙等をお送り致しましたところ、「転居先不明」として返送されたケースが目立ちました。

昭和五十六年以来、多数の同窓生が転居され、新しい卒業生の参入もあることからこのことは当然とも言えます。このため同窓会設立を機会に、本会事業の一環として、新たに『卒業生名簿』を発刊していきたいと考えております。

名簿作成にあたりましては、何と云っても会員各位から正しい情報を得ることが必要です。ご自

第一期役員名簿

(昭和六十二年八月～六十四年八月)

名譽会長	千原勝美
会長	松橋英幸
副会長	中島博稔
理事	倉田稔
風間事	武田弘
長坂勇	宮下忠
山井鋼	宮和博
原沢安	安恒男
松林牧	滝沢忠
横田通	北沢文
野村浩	赤羽恭
中府宗	小林悦
別府桂	小悦雄
幹事	関谷俊行
幹事	大井博
副幹事	関谷俊
庶務担当	和井清
竹前稀	和田清
會計担当	和井清
岡田富	内藤光
岡田富	内藤光
名簿担当	久保信
深沢よし	久保信
記録・会報担当	渡辺時
古川貞	胡桃沢
監事	清水厚



理事・幹事会

六十二年度転退職教官

- 平澤進 先生 (理科教育学)
 - 昭和二十四年九月 長野師範学校
 - 昭和二十六年三月 信州大学教育学部
 - 昭和六十三年三月 停年により退職
- 飯嶋南海夫 先生 (地学)
 - 昭和二十三年三月 長野師範学校
 - 昭和二十五年四月 信州大学教育学部
 - 昭和六十三年三月 停年により退職
- 篠原昭雄 先生 (社会科教育学)
 - 昭和六十一年四月 信州大学教育学部
 - 昭和六十三年四月 筑波大学 教育学系に転任

身に関する情報だけでなく、友人、知人等の動静につきまして、お気づきの点がございましたら事務局宛お知らせ下さい。

次にお詫びとお願いを申し上げます。

- (a) 戦後の学制改革等で、修了・卒業が旧制と新制にわたっている方へは、二重に会費請求が届いた由大変失礼いたしました。短期間の内に手作業で行ったためであり、お許しをいただきたいと思います。今後、名簿整備が進めばこうした事態は回避できるものと思われま。
- (b) 改姓者の中に「旧姓」の記名が無く、女性では同名者があり、判断に苦慮したケースがあります。今後の連絡に当たりましては必ず旧姓・卒業年月を添えて下さるようお願い致します。
- (c) 今後に会費納入される方は、振替用紙でお願い致します。

- ・氏名(旧姓も必ず)フリガナ
 - ・本拠地(帰省先)・電話番号
 - ・現住所
 - ・現在の勤務先(学生は所属課程・教科)
 - ・入学の年・月、卒業(修了)の年・月
- 又、住所変更の場合、くどいようですが旧姓や卒業年月を付してご連絡下さい。
- 尚、今回郵送分の宛名ラベルに誤字、誤記がございましたら事務局までご一報下さいますよう、お願い致します。

人事務職員紹介



小島京子さんを御紹介致します。

小島さんは篠ノ井生まれ。高等学校卒業後、長野鉄道管理局勤務。現在は二兄の母親。月水金の三日間教育工学センター事務局で同窓会のお仕事を願っています。誠実で明るく、微笑を絶やすことがありません。

信州大学人としての一体感に期待

信州大学学長 北條 舒正



本日ここに信州大学教育学部同窓会の設立総会が、多数の来賓の出席のもとに開催され、正式にこの同窓会が発足されますことを、心からお慶び申し上げます。同時に、今日の設立まで持ってこられた発起人の皆様が、並びに関係の皆様がたのご協力に對して、心から敬意を表すものでございます。

私は、昭和五十六年十一月に学長になりまして、やらなければならないと私が個人的に決めたことが幾つかございます。

その第一は、大学として質の高いものに創り上げていくということです。それには、この信州大学の先生がたの研究が、世界の水準を抜くようなものになる大学とするという事でございます。これは、現在進めております総合大学院博士課程の設置が、そのひとつの目標でございます。次に、これと関連しておりますけれども、信州大学はご存じの通りタコ足大学でございます。長年われわれは、この不便のために総合大学としての力を発揮することが出来なかつた訳でございます。これを何んとかして実質的に解消しなければならぬ、そのためにご存知の通り、信州大学の各学部間を画像でもって結び付けるというネットワーク構想の推進でございます。

さらに信州大学の全教職員・学生が、信州大学人としての一体感をもってもらう、そういう事

でございます。これは、単にタコ足大学というよりも、精神的にひとつになって、その中から大学としての一つの強さを生み出すということが大切でございます。

これを更に広げてまいりますと、卒業生一人ひとりが信州大学の卒業生であるという自覚と、一体感を持ってもらう事も必要であります。私どもが経験しておりますのは、卒業後、間のない諸君にとつては、母校という認識は余りないのが普通でございます。しかし、世の中に出ますと本人はどう思っているか、ほかの人たちからは、信州大学の卒業生として見ていられるわけでございます。

また、民主主義社会においては、数は一つの力でございます。大学になって以来、すでに学士と称する卒業生は三万人を越えております。これは一つの市を形成するだけの数でございます。そういった意味では、大変な力となり得るのでございます。私は、各部門の同窓会の活性化と、連合会の結成を呼びかけて参りました。これを機会に、いろんな学部で同窓会の再構築を計画したり、あるいは出来ていない学部で、設立の準備を始めていただいた訳でございます。本日のこの設立総会によって、信州大学の教育学部は、最後でございますけれども、同窓会が出来上がったわけでございます。

教育学部が遅れたのは、けっして皆様がたの熱意がなかった訳とは思っておりません。それは歴史的に長いところほど、後から同窓会を創るといふのは並み大抵の事ではない訳でございます。こ

の点は、私は十分承知しております。この機会に、今日まで努力されてきた世話人の方々をはじめ、関係者の皆様がたの努力に對して、深甚な敬意と感謝の意を改めて表したいと思っております。これで名実共に、信州大学同窓会連合会が出来上がったことになりました。

私は、大学の大きなプロジェクトを推進するためには、学外のいろんな方に応援を求めて参りました。しかし、その第一段は当然、身内でございます。同窓会に向けて働きかけるべきであると常々思っております。それを足掛かりとして、他の皆さん方に拡大していくのが筋道と思っております。現在までには、すでに信州大学同窓会連合会というものを作って頂いております。その会長役をやって頂いておりますのは、本日ご出席の母袋忠右衛門さんでございます。ご存じの通り、母袋さんは本年の三月まで、県会議長の重責を努めていただいた方でございます。この連合会として母袋さんいろいろな運動をしていただいで、十分その成果があがっていることをここでご報告申し上げます。

ご存じの通り、大学をめぐる問題は非常に厳しいものがございます。私は、どんな嵐の中に立たされても、びくともしない、しっかりと信州大学を創りあげていかなければいけないと思っております。大学が良くなるということは、立派な人材をそこから輩出する、また大学から優れた世界的な研究を続々生み出す、そういう事によってはじめて大学の評価というものがつくものと思っております。そういう意味で、信州大学をよりいっそう充実、発展させる上で、皆様がたのご協力を頂きたいと思っております。

長野県は教育県として、わが国に名声を轟かしております。これは本学部の卒業生の皆様がたの、永年の努力の賜であります。私は、教育県という

以上は初等、中等教育を含めて、最高の高等教育まで、日本の模範となるべきものでなければ、本当の教育県とはいえないと思います。そういう意味で、どうかこれから信州大学を共に育てあげるといふ意味で、一層のご尽力を頂きたいと思えます。

私は、戦前、外地にございましたいくつかの大学の卒業生に知人がおります。母校が無くなり、自らの青春時代を過ごした母校の思い出を、語り



教育学部キャンパスでの三十八年間に振り返ると、奉職直後出会ったいわゆる肅学事件を始めとして、実にいろいろなことが思い浮んでくる。しかし、大学での楽しい思い出となると、それはなんとと言っても、学内が平靜で、学生諸君と卒業研究テーマなどについて、心置きなく話合ったり、論じ合ったり、あるいはそれを実験で確かめ合ったりしたようなときのものであった。そんなときは生き甲斐というか、教師冥利を感じたものである。また、夏休み中のこと、実験の合間をみては学生諸君とテントを背負って、槍や穂高をさまよったことのあるのも懐かしく思いだされる。

学生諸君は、好んで口に平和を唱えながら、学内の平和維持には無関心であったように思われてならない。それでも、安倍侯対といったテーマでは、火元が外部であるため、なんとなく気が軽く、自分の研究室に火の粉が飛んでこないようにと願うだけで済まして居れたが、火元

思い出雑感

岡宮 二郎
(前教育学部長)

合うことが出来ない人たちの寂しさというものも身にしみて存じております。信州大学を、そのよくなものにしては絶対にならないのであります。どうか大学の危機に際しては、皆様がたのたくましい力をお貸しください。

本会の設立に若干関わりました私から、その経過の一部を申し上げますと共に、これからのいっそうのご活躍を希望いたしましたこと挨拶といたします。

(同窓会設立総会における学長祝辞)

が学内にあるときはそうは行かない。おっとりバケツで駆け付けざるをえないが、中には何を血迷ったのか、一生懸命団扇を煽るものもでてきて、てんやわんやになる。特にいわゆる教育実習闘争では教室どころか、研究室にさえ入ることができない状態が続き、「授業放棄は教官の恥」をモットーに生きてきたのにと、なんとも悔しく、教師稼業にも嫌気がさしたことであった。

結局教師に取って嬉しいことは毎日平凡でも、まともな授業を続けて行けるときであろう。別に奇を競う必要も無いのだが、初めのうち、私などはその要領がわからず苦労したことである。現在も初任者のなかには悩んでいるものも多いと聞く。初任者研修がそれを救うことになれば、本当に有り難いものである。しかしこれを火種とするものもあるようである。裏があるからとのことらしい。裏表の無いのは、メービウスの帯の世界で、私にはむしろ捻じれた世界と思えるが、世の中のことはどうも分からないことが多い。

(現在、佐久経済短期大学学長)

会員の声

みんなで輪をつくる

下村 和彦

在学当時のことを懐かしく想起しながら、毎年一月四日の同級会に参加する。私も二十八年程前に教育学部を卒業したA高校出身の仲間の一人である。雑草のような、そして泥臭さはあるが、計画的に企画・推進されている研究会などでは味わえない意義深い(?)情報交換をしながら、明日への活力をお互いに養っている。

国際化・情報化・高齢化がますます高まるであろう二十一世紀を担いうる子供達の教育課題が山積している中、同窓会の発展・充実に心から願っている。

(昭和34年度卒 諏訪二葉高等学校教頭)

留学の思い出

永藤 妙子



一九七六年から、文部省による教育学部学生海外派遣制度により、アメリカカンサス州ヘイズで約一年間の留学生生活を送りました。

到着後、極度の緊張と大陸性気候の真夏の暑さで、食事がほとんどできず、毎日フラフラしていました。一週間後に、初めて日本人がドミトリイに訪ねてきてくれた時は、思わず歓声を上げてしまいました。その時に食べたピザの何とおいしかったこと!

様々な国からの留学生達とも親しくなりましたが、厳しい環境の中で留学生生活を送っている人が何人かいました。本国から思想犯として追われている人、ベトナム戦争で家族を失ってアメリカに逃げてきた人等々、彼らと話す度に平和のありがたさを痛感しました。ヘイズでの生活を通して、日本人であることの誇りと、世界の人々と理解し合い強調し合う大切さを学んだような気がします。

(昭和51年度卒 長野市立北部中学校教諭)

近況報告

挨拶



学部長 千原 勝美

と祝意を表する次第であります。

明治六年に師範講習所が設置されて一五五年、昭和二十四年に教育学部が創設されて四〇年、その間、明治期の長師同窓会、松本女師の彰風会、青師の同窓会などがありました。ここに教育学部同窓会の設立を見ましたことは、この時期を逸しては恐らく困難と思われただけに、関係者各位のご苦労・ご尽力は、大変なものがあつたと存じます。まことにありがたいことと感謝いたしているところであります。

さてご承知と思いますが本学部には四教員養成課程があり、小一九〇・中八〇・養護二〇・幼稚園三〇、計三二〇、合計一、二八〇の学生定員を持ち、第一年度は松本の教養部で教養課程を、第二年度以降は長野の本学部で専門課程を履修することになっております。四十一年度から松本分校が廃止されて長野本校に統合され、松本には全学部学生が学ぶ教養部が設置されて、教養課程が一元化されました。また、四十七年度設置の教育専攻科(修業年限一年、定員五)もあります。学部専任教員一〇〇人が、これらの教育・研究に携わっている次第であります。附属施設としては、志賀高原に四十一

年四月設置の志賀自然教育研究施設があり、これは二十九年建設の植物園研究所、三十七年の生物研究所の学部レベルでの苦心経営の所産であります。四十七年に新館が竣工し、高山地における自然科学の学術研究と、学生の自然教育の実習、研修を実施し、全国的にも珍しい研究施設となっております。一方、学部構内には四十九年度設置の教育工学センターがあり、教育工学についての理論的実践的研究を目的としております。

附属学校は六校園があり、長野に小・中・養護の三附属、松本に小・中・幼稚園の三附属で、両地区教育実習ともに、例えば小学校課程の教生も一定期間中学校での実習も行われております。現在の一年・二年次生は、受験機会の複数化に伴う入学者であり、他府県出身者の増加が見られます。しかし、逆に長野県出身者の他府県教育学部入学者もあがりうるわけで、今後どういふ様態になるのか、直ちには判りません。

今後の学部の整備・充実は、施設・設備も含めて多々ありますが、大きな課題の一つに大学院修士課程教育学研究科の早期実現があります。学部の教育研究の一層の充実の上からも、地域教育界のご期待にこたえるためにも、また免許法の改正に伴う対応のためにも、一日も早い設置を努めているところであります。今一つは、幸いこの三月の卒業生の教員就職状況は良好でありましたが、児童生徒数や義務教育学校教員の定年退職者数の減少傾向はますます顕著となり、相当長い期間にわたって続くことが予想されております。これへの対応として、六十一年七月の文部省の指針を踏まえ、学生定員の一部を振替えて、教育関連分野の職域への道を開き、この整備によって学部の充実と活性化をも図るべく、教育情報や生涯教育に関わる人材の育成を目指した教育文化の課程・コースを構想し、これを進めているところであります。

以上、本学部の現状と課題を主として述べ、ごあいさつに代えさせていただきました。時に応じ事に即してのご理解・ご支援・ご鞭撻をお願い申しあげ、併せて同窓会のご発展と会員各位のご清祥とご活躍を、お祈り申しあげます。次第であります。

信州大学教育学研究科(修士課程)設置について

大学院設置準備委員長 吉岡 利治

本学部に大学院教育学研究科(修士課程)を設置することについては、学内外よりの要望にこたえて昭和五十年頃から諸準備が推進されて来た。その経過の概略は次の如くである。

- (1) 51年「将来計画委員会」設置
- (2) 54年「大学院・学部等の改革構想について」教官会に答申

その結果「大学院問題研究委員会」発足

- (3) 57年 右委員会は「大学院研究委員会」に改称
- (4) 57年12月「委員会」による「大学院(修士課程)設置の趣旨と基本構想」に基づき、設置のための具体的作業に入る。

- (5) 58年「設置構想案」作成。文部省による指導
- (6) 59年「委員会」は「大学院設置構想委員会」と改称。「設置計画書」(第二次案)作成

- (7) 61年「第二次案」を一部改め「第三次案」作成。文部省による指導

(8) 62年12月「第四次案」作成。現在に至る

大学院設置は、教育学部における一般的、専門的教養並びに就職教養・技能を基礎として、学校教育にかかわる諸専修領域について深い学識を授け、教育実践の場における理論と応用の研究能力を高め、もって教育に関する高度な専門的学識と教育活動への創造的推進能力を有する人材を育成

教育学部

することを目的としている。近年の社会構造の急激な変化や価値観の多様化によって教育環境は複雑となり、教育実践への新たな専門的対応が期待されている。このため、学校教育は、高度な教育研究とその成果にもとづく専門性を備えた人材を一層必要としている。かかる人材育成の要求に応えることは、当地方の教員養成機関の中心的機能を担う信州大学に課せられた責務である。

また、他学部には医学研究科(博士課程)及び人文科学をはじめ五研究科(修士課程)が設置されており、何れもその目標とする教育研究の実をあげている。これら

既設の研究科は、言わば特定の学術的領域における専門的教育研究を指向するものであるが、教育研究科においては教育学及び個別諸科学における教育研究の推進と両者の統合による学術的教育研究がその目標であり、その成果は学校教育を中心とする現代教育に寄与することが期待される。こうした期待に応えるためには毎年度の大学卒業者のみに院生を限定するのではなく、現に教育の職にある者にも拡大する必要がある。従って本教育学研究科は教育実践の場で経験者と未経験の学部卒業者との双方を対象として、より高度の専門的教育を行うことにより、教育実践への広い関心と充分な教育実践能力を合せ備えた人材の育成を図る場とする必要がある。

信州大学教育学部は、これまで多数の教員を地域教育界に送り、多大の貢献をして来ている。この実践を基礎として、教育学研究科を新たに設置することは、地域や学校の多様な教育活動と大学における教育活動とを一層積極的に結びつけることになり、真に「開かれた高等教育機関」として地域社会において一層大きな役割を果すであろう。

このことに対する地域社会及び教育界の要望は極めて強い。さらに、信州大学においては、既設の研究科、学部、附属教育施設を基礎とする総合科学研究科(仮称「博士課程」)の設置構想が鋭意検討されている。このこととも関連して、信州大学に教育学研究科を設置することは、本学における大学院整備計画の一環を担うものとして位置づけられるものであり、その実現は信州大学として当然の課題である。尚、現在、昭和六十四年度実現を目指し関係方面に対し交渉中である。

同窓生諸兄のお力添えを切に願います。次第である。

就職事情について
六十二年度就職委員長 小口 正行

はじめに

信州大学教育学部の常置委員会に就職委員会が置かれて今年で五年目になります。教員養成を標榜している本学では卒業生のほとんどが教員志望でありますので、その中心的活動は教員採用についての取り組みであります。

しかし、率直に言って卒業生を迎え入れる現在の教育界の教員の需要状況は極めて厳しい事態にあります。それは言うまでもなく近年の児童・生徒数の著しい減少を要因とする教員需要の極度の減少であり、それらが従来にみられなかった教員の採用率の悪化をもたらしていると言ってもよいでしょう。これら昨今の厳しい就職事情を踏まえ、当委員会は一丸となって学生の就職問題に取り組みでまいりました。

二 卒業生の就職・進学状況

次に昭和六十二年度卒業生の就職・進学状況を、紹介いたします。次の表(一)をご覧下さい。

表(一) ()の数字は臨時内数

		就職者				進学者	その他	合計
		教員		教員外				
		県内	県外	県内	県外			
小学校	男女	88(6)	5(2)	4	2	3	102(8)	
課程		70(1)	1	6	2	3	82(1)	
中学校	男女	67(8)	2(1)	4	4		77(9)	
課程		32(3)		5	1		38(3)	
養護学	男女	7					7	
校課程		11(5)					11(5)	
幼稚園	男女	19(4)				1	20(4)	
課程		162(4)	7(3)	8	6	3	186(7)	
合計	男女	132(3)	1	11	3	4	151(3)	
	女計	294(7)	8(3)	19	9	7	337(4)	

三 今後の教員需要の展望

今後の教員需要の展望について述べてみたいと存じます。まずそこで挙げられる要因としては、児童・生徒数、学級編制および教員定数、教員離職者数、採用方針等が考えられます。そのうちでも基幹資料となる児童・生徒数、学級数および教員数の年次別推移をみてみますと、次表の通りであります。

表(二)をみておわかりと思いますが、これからの教員の就職状況はかなり長期にわたって一段と悪化し、当分の間好転することは期待できないと予想されます。しかし、すでに部分的に実施されています四十人学級のように、教員の需要関係は教育政策・行政と大きくかかわっていることですので、その改革によって変動することも考えられます。しかし、厳しい情勢にあることは間違いありません。

就職問題は自分自身で切り開いて行くものではありませんが、学生・教官・事務官の緊密な連携と同窓生の皆様のお力添えを賜れば相当な成果を挙げることができると確信しています。教育は学生が自ら定めた道であります。希望をもって研鑽を積んで行って欲しいと願っております。

表(二) 全国公立小・中学校推定児童・生徒数、学級数、教員数等の推移

年次	児童・生徒数	学級数	教員数
昭60	11,041,900	329,979	448,639
昭64	5,778,010	150,970	273,855
昭68	9,409,580	285,339	393,996
	5,473,370	144,207	262,826
	8,300,020	254,996	357,504
	4,653,780	126,014	233,154

信州大学教育
学部同窓会

第一回総会の開催 (通知)

日時

昭和六十三年八月十一日(木)午前十時

会場

長野市旭町信濃教育会館二階・大講堂

次第

一、開会

二、会長挨拶

三、議長選任

四、議事録署名人の選任並びに書記の任命

五、議事

第一号議案 昭和六十二年度までの事業報告書、収入・支出計算書および財産目録の承認について

第二号議案 昭和六十三年年度事業計画書(案)および収入・支出予算書(案)の承認について

第三号議案 会則第六条一正会員規定の一部改正について

第四号議案 役員の一部変更について

六、来賓祝辞

七、閉会

記念講演 (一般公開)

表現化の時代に

—個性表現とは—

本学部第十七回卒業生

佐藤綾子氏

(東京実践女子大学助教授)

国際化時代を迎え、「自己表現」の重要性が益々高まっています。

また、学校教育においても、情報化の進む社会の中で、個の主張とコミュニケーションの在り方が大きな課題となっています。

深い学識と、豊かな経験に基づく佐藤氏の個人的なコミュニケーション論「パフォーマンス論」にご期待下さい。

〈講演の骨子〉

- (1) るつば社会からレインボウ社会へ
- (2) パフォーマンスとは何か
- (3) 言語表現と非言語表現
- (4) 内的自己
- (5) 活字人間とヒューマン・ネットワーク

プロフィール



昭和二十二年長野県生まれ。信州大学教育学部(英語科)卒業後、東京都公立中学校教諭。上智大学大学院で演劇を学ぶ。

ぶ。ニューヨーク大学大学院パフォーマンス研究学部へ留学。日本に初めてパフォーマンス論を紹介。現在、実践女子大学助教授。文筆活動のかたわら、日本ペンクラブ会員、中小企業事業団委員、多摩ニュータウン住宅建設委員会ブレインリーダーなど他方面にわたって活躍中。著書多数。

記念講演終了後、長野国際会館「平安の間」において、第一回総会記念祝賀懇親会(会費五、〇〇〇円)を開催します。こちらへも多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。

〈編集後記〉

この号は学部の情報や教官の執筆した記事が比較的多くのスペースを占めている。学部は、同窓会員が青春の日々をそれぞれに生きた共通の心の「ふるさと」である。その意味で、先ず学部の現況を知って欲しいという願いもあつたからである。その他にも、報告したいことが沢山あつた。アイスホッケー・クラブの活躍を初め、学生のサークル活動の状況や、学部における国際化なども扱ってみたかった。また、教室不足、図書館設備の貧弱さ、敷地の手狭さなどのネガティブな側面にも触れる必要があつたかもしれない。これらについては追々報告することにし、次号では、広く全国各地で活躍している同窓生からの懐かしい声を多数お届けしたいと考えている。ご自分のこと、先輩、後輩の情報何でも結構ですので事務局までお知らせいただきたい。

幸い、同窓会事務局として、構内の教育工学センターの片隅を借りることができ、月水金の午後ここで小島さんに勤務して頂いている。ご来長の折には是非お訪ね下さい。

最後に、ご多忙のなかご寄稿いただいた皆様衷心より謝意を述べて後記の結びとしたい。

(古川・渡辺)